

# アルゼンチンアリ

岸本年郎



↑ 行列は大規模で迅速に走りまわる

← 蛹を運ぶアルゼンチンアリのワーカー  
(左右写真ともに今井 仁氏撮影)

アルゼンチンアリ (*Linepithema humile*) は南米原産で、世界の各地の主に温帯から亜熱帯域にかけて侵入し、各地で大きな被害を与えている大害虫である。国際自然保護連合 (IUCN) の選定した世界の侵略的外来種ワースト100、日本の侵略的外来種ワースト100、外来生物法による「特定外来生物」等に選定されており、日本でも世界でも、札付きの侵略的外来種となっている。

その被害は、①生態系への被害、②農業への被害、③人間生活への被害に大別できる。まず、①生態系の被害では、侵入地で在来のアリをほぼ駆逐し、アリ以外の節足動物も捕食や競合によって排除、減少させる。また、海外では他の昆虫を減少させることを通じて、植物の種子散布や花粉媒介、ひいては植物の繁殖率にまで影響を及ぼす事例が知られている。

②農業への被害では、甘露を排泄するアブラムシやカイガラムシといった農業害虫を保護することで、間接的に被害を増加させる。彼らの天敵であるテントウムシ、クサカゲロウ、寄生蜂等を撃退することが観察されており、北米等では果樹園等での被害が顕著であるようだ。

③生活への被害ということでは、家屋内への侵入がもっとも身近で深刻である。たかがアリと思うかもしれないが、高密度発生地では頻繁に大量のアリが列をなして室内に侵入し、食べ物にたかる等の被害が続出する。害虫としてもっとも問題になるのは、生活被害かもしれない。広島県や山口県の一部では日常的な不快害虫として大きな問題になっている。

アルゼンチンアリが侵略的となる要因として、その特殊なコロニー構造が挙げられる。多くのアリでは、女王は一巣に一頭で、異なるコロニー同士は互いに排他的である。ところが本種は女王が多数存在 (多女王性) し、巣間の敵対性がなく広範囲に多数の巣からなる巨大なコロニー (スーパーコロニー) が形成される。その結果、侵入地がまさにアルゼンチンアリに埋め尽くされる状態となってしまう。

日本では1993年に広島県廿日市市で発見され、これがアジアにおける最初の侵入事例報告となった。以後、現在までに発見順に兵庫、山口、愛知、神奈川、岐阜、大阪、京都、静岡、徳島、東京、岡山の各都府県で侵入・生息が確認されている。静岡県では静岡市清水区の一隅で2009年にはじめて見つけ、2013年からは静岡市が餌剤による防除に取り組んでいるが、昨年までにはかなり減少させており、効果が現れてきているようだ。本種は世界でも根絶事例のない難防除害虫であるが、日本では防除技術開発が進んでおり、東京と横浜において、根絶まであと一歩という段階になっている。特に新規侵入地で生息範囲が狭い場合は、根絶が可能となりそうだ。静岡県でも生息域は限定的で、根絶を目標にした防除を目指すべきであり、これまでの経過を見ると十分に達成可能と考えられる。二次的に拡散を起こし、手が付けられなくなる前に対策を進めることが重要である。